

類似しない類似

— 神への上昇の偽ディオニシオスの方法 —

大月 栄子

序

偽ディオニシオスは、『神名論』と『天上位階論』の両著作において、聖書から引用した神と天上の存在者（*θεοπατριάρχης*）もしくは天上の知性（*οὐρανία νοῦς*）の名称と形象に関して論じている。『神名論』では聖書に著される神名を註解し、また、恐らく偽ディオニシオスの最初の著作と考えられる『天上位階論』では、天上の存在者や神に与えられる様々な形象について語られている。その『天上位階論』の導入部では、天上の存在者や神がどのような形象で表現されているか、そしてなぜそのような形象で表現されているのかを論じており、神や天上の存在者に名称を与える、また形象で表すということそのものについてのイントロダクションになっている。そのため、『天上位階論』の第一章から第三章は、偽ディオニシオスが神と天上の存在者の名称や形象について、それをどのように解釈すべきかという方法論を具体的な神名や形象の解釈に先立って説明している部分として重要であると思われる。

類似しない類似（大月）

る。本稿では『天上位階論』の第二章を中心に、そこで頻繁に見られる「類似しない類似」（*ὁμοίωσις ἀπορίτων*）という特異な表現に焦点を当てて、彼が神や天上の存在者に付与される形象から何を読み取るうとしているのかを考察していきたい。

一 神の隠れと啓示

さて、「超（*ὑπέροχος*）」という語が偽ディオニシオス神学を特徴付ける語のひとつであるように、神は被造物の世界を遙かに超越し、我々の眼からは隠されているということ、つまり、我々は神を知りえないということはまさに偽ディオニシオスの神学の出発点になっている。それは偽ディオニシオスが『神名論』において次のように述べているとおりである。「神についての認識や観照はそれがどのようなものであれ存在を超えた形で隔たっているから、すべての存在者にとっては近づくことの出来ないものである」。偽ディオニシオスは、『神名論』と『天上位階論』の両著作で神や天上の存在者の様々な名称あるいは形象を挙げて解説しているが、神はそれらのうちのどれでもなく、存在者の世界から隔絶しているという意味で、それらの形象の上に「超」という語を付している。しかし他方で、神は我々にとって全く不可知ではない。偽ディオニシオスは同じく『神名論』において「存在を超えて秘められた神性について、聖なる書において我々にふさわしく開示されていること以外にはあ

えて語ったり、考えたりしてはならないのである」と述べている。これによると偽ディオニュシオスは、少なくとも神について聖書に書かれていた表現からは何事かを読み取ることが許されていると考えられているようである。このことは『神名論』第一章だけで二度繰り返し返しているし、同様の主張は『天上位階論』でも見られる。「……次に、天上のヒエラルキアを聖書におけるそれらの啓示に従って讀まなくてはならない。これに続いて、御言葉の聖なる記述が天上の階級をどのような聖なる形によって描写しているかを言わなくてはならない」と述べているとおりである。存在を超えた神についても、また神的存在者についても聖書が明らかにする表現を手がかりに何事かを知るべきであると考えられているのである。

二 象徴の導入

『天上位階論』では第四章以降は主として天上の存在者の形象について扱っているが、第一章から第三章では天上の存在者と同様に神に関する形象についても扱われている。ここで偽ディオニュシオスは聖書には神や天上の存在者が多くの形象で表現されていることを示している。だが、聖書における神や天上の存在者についての表現には感覚的、物質的な表現を用いたものも少なくない。しかし、こうした感覚的な表現はある種の人々には受け入れがたいものであった。そのため、このような形象

表現に対する批判があったものと思われる。それは次のような記述から推測される。偽ディオニュシオスは「……しかし(ある人には)聖書における聖なる知性の表現は不適切であると思われるし、すべての天使の名前の見かけ(γεννη)はいわば不適切だと思われるだろう。またその人は次のように主張する。つまり、神について教える人々は身体のないものの全体的な身体表現をするに至り、それを出来る限り適切な、似通ったものによって新たに形づくり(οικειοῦσιν σφραγιστικῶν ὀνομάτων)、我々の周りで価値のある、ある種、非質料的な超越的な存在者の姿・形によって(σχηματισμοῦ)明らかにしなくてはならない」と述べている。ここから、批判者たちは神や天上の存在者が感覚的で物質的な形象で表現されるべきではなく、それら天上的なものは何か感覚を超えた崇高な形象で表現されるべきだと主張していたということが窺われる。偽ディオニュシオスはこの批判に対して、神や天上の存在者に帰せられる形象を再考することで反論を試みている。

彼は先の批判に対して次のように答えている。「恐らく形のないものの形(τῶν ἀσχηματιστοῦ)や身体のないものの身体(τῶν ἀσχηματιστοῦ δογματιστοῦ)が提示されることはひとつの原因によるのではない。ある人は次のように主張する。つまり、我々においては直ちに知性的なものの観照へと引き上げられることは出来ず、固有で生来の上昇を必要とするのである。その上昇は、形のない、超自然的な観想対象の、我々にとつて

理解しうる形を提示するのである」⁽⁶⁾。つまり、我々の知性は知性的なものを直知することは出来ない。まず感覺的なものの認識を通して知性的なものの認識にいたるのが自然であり、それが我々にふさわしい方法である。我々は神や純粹に知性的な存在者を直知することは出来ない。そのため、神や天上の存在者について何かを知ろうとする際、その手がかりとなる象徴が必要となるのである。聖書の中に感覺的、物質的表現があるのはこのためであると彼は考える。

さて、偽ディオニュシオスは、聖書の中の神や天上の存在者に関する様々な形象の中からいくつかを挙げ、それらの形象を通して神や天上の存在者の認識へと進んでいく方法をおよそ次のように大別している。一つは「それらしいものとして類似した聖なるものを表す像を通して (ὁμοεικότως εἰκονίζοντα) 進んでいく」方法である。ロゴス、ヌース、ウーシア、本当に存在するもの、存在するもの、存在の真なる原因などがその例として挙げられている。今ひとつは「似ていない形を通して全く適切でなく、ふさわしくないものへと形作っていく」方法である。これは「否定的な表現を使って世を越えた仕方では賛美する」仕方であり、「目に見えず、限りなく、把握できないものと呼ばれている」ものを認識しようとする方法である。そして、偽ディオニュシオスは「私が思うにはそれ(神)に関してはそのこと(否定的な方法を用いること)が、より正しいのである」⁽⁷⁾と述べ、これら二つの方法のうち後者、つまり

類似しない類似(大月)

否定的な表現を通して神や天上の存在者の認識に至る方法の方をより重視している。

三 類似しない類似 (ὁμοεικότως εἰκονίζοντα)

(一) 覆いとしての形象

では偽ディオニュシオスは、なぜ自らもふさわしくないと語る不適切な表現を通して進んでいく方法のほうを、神や天上の存在者を知るためのより正しい方法だと考えているのだろうか。その理由は、一つには不適切な表現がヴェールの役目を果たすということであろう。彼は不適切で醜惡な表現について「このように神の知恵を持つすべての人と隠された靈感の解釈者たちは汚れない仕方です『聖なるものの中で最も聖なるもの』を伝授されていない者や不敬虔な者から区別し、似ていない表示を敬ったのである」⁽⁸⁾と述べている。この箇所では、不適切な形象は不敬虔な者を遠ざけるためのものであると言われている⁽⁹⁾。不敬虔な者あるいは伝授されていない者は、不適切な形象をみて、そのような形象の醜惡さのために、それ以上神や天上の存在者についての知を深めることがないと思われるのである。このように、一見神や天上の存在者には似ても似つかない不適切な形象は、不敬虔な者や未だ伝授されていない者にとつては、嘲笑すべきもの、あるいは嫌悪すべきものでしかない。他方で敬虔な者にとつてはより敬うべき形象となりうるのである。彼らは

それが何を意味し、なぜそのような形象が神や天上の存在者に対して使用されているのかをより深く追求しようとするからである。同じ不適切な神や天上の存在者には似ても似つかない形象であっても、それは受け手によって取るに足らないものにも価値あるものにもなりうるのである。

(二) 否定としての形象

また、彼は聖書の中の感覚的表現、つまり不適切な表現について次のようにも述べている。「……より尊敬すべき表象に惑わされるということはありそうなことだからである。つまり、天上の存在者が、何か金のようなものだから、きらきらと輝く人の方だとか、輝く美しい衣を着た人だとか、害を与えない仕方だ燃える火の方だとか、その他多くの美しい、類似してつくられたもので (ὄρασις ἁλῶσις ὁμοιοπαράσις κἀλλεσις) 聖書は天上の知性を形作ったのである。美しく現れているものよりもより高いものを何も考えない人々が、そのようなことを蒙らないように、神について教える聖なる人々の上昇的な知恵は不適切な非類似へと、聖なる仕方で降りていったのである¹⁰」。つまり、神や天上の存在者に対する一見不適切に見える表現を批判する人々も、「金のようなもの」とか「きらきら輝く人」のような一見すると響きのよい、高尚な表現ならば受け入れる可能性がある。しかし、こうした一見高尚そうな表現も結局は感覚的、物質的な表現に過ぎない。偽ディオニュシオスは、受け入

れやすい、一見ふさわしく思われるような形象に関して「そのような聖なる表現はより莊嚴であり、質料に属する形がある意味で超えているように思われるが、テアルキアの真理への相似には (τῆς θεοπρακτικῆς πρὸς ἀληθεῖαν εὐπέπειστος) 同じように達していないのである¹¹」と述べており、一見高尚な形象もふさわしくない形象も実は同様に神には類似していないと述べている。確かにロゴス、ヌースなどの知性的な形象は、質料的な形象よりも神や天上の存在者のような崇高なものを表すのに適切であるように思われるが、どれほど崇高な形象も神や天上の存在者にはほど遠いのである。先の『神名論』の引用のとおり、神は存在者の世界から遠く隔たっているからである。また、天上の存在者は質料を持たないから、金のようなものでも、輝く人でもない。神はロゴスと言われるが、ロゴスということばでは表現しつくせない。それはヌースであれ、他のどのような莊嚴な形象に関しても同様である。不可視的で、非質料的な神や天上の存在者には人間が想像しようどのような形象や概念を当てはめてもその対象そのものには類似していないのである¹²。従って、神に関しては何であるかというよりも何でないかが問われるべきである。偽ディオニュシオスはここで「神はくでない」という否定を進めていくことよって、神に向かつて上昇していく否定神学という方法を援用することで聖書の形象を解釈していると思われる。熊田陽一郎はこれについて「ディオニュシオスがあえてこの異質にして低級なる物質的形象を擁護する

のは、それが彼の神学の根本理念と関わるからである。すなわちこの世界すべての存在者を超越する神の表現のためには、肯定表現よりもむしろ否定表現のほうが優るとする、いわゆる否定神学の理念である。非類似形象はこの否定表現に対応し、人間をより深い神認識に進ませるものと彼は考える」と述べており、不適切な形象の優位性の背後に偽ディオニュシオスの否定神学をみている。しかし、この方法によると、醜悪な形象が当然神の形象としては否定されるべきであるとしても、一見適切に見える荘嚴な形象もまた神を端的に指示するものとは言えないので、否定されなければならないことになる。むしろ一見類似しているように見える形象のほうがもつともらしいものとしてより欺くものであるとさえ思われる。心地よい響きをもつ表現は、そこに安住してしまいう危険性を含むからである。

(三) 刺激を与える形象

以上のように、偽ディオニュシオスは、どのような形象であれ、神や天上の存在者を指し示すには十分ではないとしながらも、創世記を引用して次のようにも述べている。「特にこのことを考えなくてはならない。一般に、存在するもののうちで美の分有を奪われたものはないということである。それは御言葉の真理が「すべてのものは大変美しかった」と述べているごとくである」。万物は基本的には何らかの仕方で神的な美を分有している。従って神的な美を分有しないものもそのも存在してい

類似しない類似（大月）

ないのだから、存在するすべてのものは、たとえ醜悪なものであっても何らかの仕方であらう美を分有しているために、神や天上の存在者に類似しているはずである。その中でも、先に述べたような一見神や天上の存在者にふさわしい表現は、神や天上の存在者に類似しているもののように思われる。しかし他方で、存在者のうち醜いものは存在する限り何らかの仕方であらう美を分有しているにもかかわらず、一見したところ、神や天上の存在者には類似していないように見える。そのため、偽ディオニュシオスは、神的な美を分有している限り、何らかの仕方であらう美を分有しているが、一見すると似ていないように見えることから、このような形象を「類似しない類似」(ἀπομοιωσιονμοιωσιον)と呼ぶのである。

偽ディオニュシオスは「似つかわしくないものが類似するものよりもむしろ我々の知性を引き上げるということは、正しく考える人ならば、誰も否定しないと私は思う」と述べ、不適切な形象、類似していないように思われる形象のほうを適切な形象よりも重視している。彼によれば、類似しない類似の方が「我々の知性を引き上げる」ことができるからであるという。

しかし、神や天上の存在者にふさわしくない形象はなぜ我々の知性を引き上げることができるのか。彼は不適切な形象を重視する理由を次のように説明する。「神について教える聖なる人々 (Deacons) の上昇的な知恵は、不適切な非類似へと聖なる仕方であらう降っていたのであるが、それは質料に属するものが、

恥すべき像に留まって休むことを許さず、上昇する魂を刺激し (θλασιστάρα)、しるしの醜さによって激励するため (προνούτρονα ἐν θυσιόφιλία τῶν σπυθημάτων) である⁽²⁾。表面上、好ましい形象は神や天上の存在者が本当にそのようなものであると(例えば、何かきらめく衣を着ているなど)文字通り理解したり、心地よい響きに安住してしまう危険性があるが、故意にふさわしくない表現が使われているのを見ると、神や天上の存在者が文字通りそのようなものであるとはまず考えないのである。しかし、神や天上の存在者が、文字通りふさわしくない形象のようなものでないとしても、すべての形象はどのようなかであれ、神に類似しているはずであるから、一見似ても似つかない形象も神に類似していることになる。そこで、一見似ていない形象は一体どのように神に類似しているのかという疑問が起こり、神とは、また天上の存在者とは何かという探求が一層深められるのである。A・ラウスはこの「刺激する」という表現に注目している。彼は「刺激(egad)」という言葉は、我々の信仰を駆り立て、上昇させるものとして使われていると説明する。ラウスのこの見解は、不適切な形象が重視されるのは、それが知性を上昇させるためであるから、妥当すると思われる。類似しない類似はいわば衝撃を与える効果をもたらすのではないだろうか。

(四) 情念の捉え直し

偽ディオニュシオスはさらに、「知性を有するものは、感覚的なものに対して割り当てられるのとは別の仕方です(質料的な類似)をもつのである」と述べ、怒りと欲求という情念や自制力の無きなどを例にとりて説明しているので、その箇所をみておきたい。まず、怒りという情念について述べている箇所である。「怒り(ὀ θυμός)というものは理性のないものにとりては衝動という情念から生じる(ἐξ ἐπιταθῶνδς οὐρίης ἐπιτηναι)のであり、怒りという動き(κίνησις)はあらゆる理性のないもので満ちている。……しかし、知性的なものに関しては、怒りというものは別の仕方で(ἐπεφῶ ποθῶ)考えられなくてはならない。……それは神に似た、変化しない基盤に立つそれらの雄雄しい論理性や厳しい性向(τῆν ἀπεφῶνδν οὐρίαν λογόητα καὶ τῆν ἀμετακτον ἐξίτι)であることは明らかである⁽²⁾。ここでは、怒りという情念が、理性的でないものに関しては、通常のネガティブな意味、つまり衝動的な憤りと捉えられるが、それが理性的なものに対して言われるとき、もはや憤りという情念ではなく、厳格さとしてポジティブに解される。また、欲求については次のように説明している。「私たちは次のように主張する。このように、欲求(ἐπιθυμία)とは理性のないものに関しては、変化しやすいものにおいて、生得的な動き(κίνησις)あるいは習慣(συνήθεια)から制御なく生じる何か思慮の無い、質料に属する傾向であり、ことごとくあ

らゆる生き物を感覺的な欲求に従うものへと強い身体的な欲求の非理性的な支配である。……他方類似しない類似を知性的なものに対して適応し、それらに欲求というラベルを貼り付ける時は、理性と知性を越えた非質料的なものへの神の愛であり、存在を越えた仕方では、聖なる、感覺によらない観想への、また汚れない至高の輝きへの確固とした頑強な憧憬、真に永久の知性的な交わりの、目に見えない美を作り出す美しさである。我々は主張する。怒りの場合と同様に、ここでも欲求という概念が、非理性的なものに対して言われるのと理性的なものに対して言われるのでは、異なる意味で解釈されている。それは一方では、本能的なものであり、欠乏を補うための押さえの利かない求めや駆り立てであるが、他方で理性的なものについて言われるときには、それは非質料的で崇高なものへの堅固な切望であると言われる。また自制力の無さについても、「さらに自制力がないということ (dis-ordered)」は、熱心で確固とした誰にも妨げられない力 (知性的存在者) に関しては、神的な美への混合されないのである。不可変の愛と真に欲求すべきものへの完全な傾きによるのである」と捉え直されており、本来のネガティブな意味とは異なった仕方では説明されている。このほか、理性的なこと、感覺のないことについても同様に、否定的な意味は肯定的な意味で解釈し直されている。このように偽ディオニュシオスは質料的な存在者が有する情念は知性的な存在者においては「別の仕方では」解釈されなくてはならないという。こうし

類似しない類似 (大月)

た情念の捉え直しをもつ意味について彼は次のように説明している。質料もそのすべての質料的な階級に従って真に美しいものの存在に向かつており、知性的な美しさの何かはるかなこだま (ontological tiva tiva vopod'empetelug) を有し、そしてそれらを通して非質料的な原型へと導き上げられることが可能になるからである。この箇所では、情念という非理性的なものが、それを通して神的なものへと上昇するための「こだま」として捉え直される試みがみられる。つまり、質料を有するものも、それを通して神的なものへと上げられるような、神との類似を有している。従って、情念も質料的なものに属する限りでは本能的な欲求や傾きと解されることにも、神に似ていくために神から与えられた「こだま」と解されることによつて積極的なものへと捉え直されるといふことである。従つて、神や天上の存在者にふさわしくない形象は、一見似ても似つかないという点において否定されるべきものであるが、同時に何らかの仕方では類似しているという意味で積極的に捉え直される必要がある。似ていないことで否定されるが、似ていることにおいて肯定されるからである。

結び

『天上位階論』第二章の最後で偽ディオニュシオスは「天使達の顯示する形の不恰好さが我々を当惑させ、我々の知性がふさ

註

わしくない表示に満足せず、質料的な傾向性を拒否することを促し、世を越えた上昇へと明らかにされたことを通して聖なる仕方で引き上げられることに慣れるのでなければ、我々はポリアから探求へと、聖なる事柄に関する厳密な研究へやってくることはなかつたであろう」と述べている。『天上位階論』第二章において偽ディオニュシオスは、聖書の提示する不適切な形象を批判する人々に対して、これらを解釈し直し、正しく理解されるよう促すという一見聖書解釈のような体裁をとっている。しかし、「天使達の顕示する形の不恰好きが我々を当惑させる」と述べられているように、彼自身もこうした不適切な表現に当惑させられ、その意味を問ひ直そうと試みたのではなからうか。彼は「類似する」ということの意味を再考し、「一見類似する形象はむしろ神に類似しないものを神だと思ひ込む状態に我々を留まらせる危険性を包含していると指摘している。これは、人々が心地よい表現に安住することを許さず、類似しない類似によって神や天上の存在者の形象理解を根本から覆す試みである。この非類似によって揺るがされて、我々は不適切な形象を「別の仕方で」解釈することができ、さらに一歩進んで、神や天上の存在者の認識を深めることが出来るのである。それはもはや形象の意味を探求するところだけの問題ではななく、それを通して我々を神への上昇へと導くものである。

(1) ローレンスは、多くの手写本の伝承から『天上位階論』がディオニュシオス文書の中で最初のものであるとしている。彼は『天上位階論』が最初に来るのは、我々がその中で直ちに「決定的な局面 (crucial facets) に出遭うからである。それは文書を買いて繰り返す著者の神学的方法である」と述べ、ディオニュシオス文書全体を貫く神学的方法論がこの著作の最初の部分で説明されていることから見て、この著作が最初に書かれたものであると推測している。

Paul Rorem, Pseudo-Dionysius. A Commentary on the Texts and an Introduction to Their Influence, N.Y., Oxford, 1993, p.47.

(2) De Divinis Nominibus I, 588C (以下 DN と表記する)。

(3) DN I, 588A.

(4) De Coelesti Hierarchia II, 136D-137A (以下 CH と表記する)。

(5) CH II, 137B-C.

「神について教える人々」は、原文では θεολόγοι である。 Lampe 教父キリシム語辞典 (G. W. H. Lampe (ed.), A Patristic Greek Lexicon, Oxford/N.Y., 1961. 以下 Lampe と表記する) に「*θεολόγοι*、偽ディオニュシオスにおける「神について教える者」あるいは広義の「神学者」の意味で用いられている。『神名論』第三章ではペトロに対

「聖書記者」の意味で使われつつある (Lampe, p.628)。「見かけ」と訳した語は ἡ σκητιή τῆ' 本来は「幕屋」が「すまじ」の意味である。ここには Lampe から pretence の意味を採用し、「見かけ」とした (Lampe, p.1236-37)。
 σκητιή τῆ' 「同類の」「類似した」という意味であるが, ὁμοίότης を「類似」と訳してゐるのび、それと区別するため「似通ったもの」とした。

- (6) CH II, 140A.
- (7) CH II, 140C.
- (8) CH II, 140C.
- (9) CH II, 140D.
- (10) Ibid.
- (11) CH II, 145A.
- (12) 同様に「伝授されていない者」と訳出した δρέλαστος という語は、洗礼を受けていない者という意味での「伝授されていない者」のようである。Lampe はこの語での偽ディオニシオスの用例は出てゐない (Lampe, p.256)。偽ディオニシオスの他の箇所ではむしろ ἀμύητος が使われている。彼は「伝授されていない者 (ἀμύητος) を嚴格に区別しているように思われる。『神名論』では「それゆえ愛するディオテオよ、あなたは次のこと守らなければならぬ。すなわち最も聖なる教導に従ひ、神のことを、伝授されていない者に語つたり洩らしたりしてはならぬ」(DN

I, 597B) と記す。『教会位階論』にも出て「神に関するこうした事柄が伝授されていない者によつて共有せられたり、冒瀆せられたりする」ものなるようにしてある (De Ecclesiastica Hierarchia I, 372A) と述べている。「伝授されていない者 ἀμύητος」は「秘法を伝授する μυσία」に由来し、μύησις という名詞形ではヤンブリオスの用例がある。ἀμύητος にも「非キリスト教徒」や「未受洗者」、「洗礼志願者」、「新入信者」などの意味もあり、「ニエッサのゾニコリオスやカイサリアのバシレイオス、アレクサンドリアのクレメンス、ヨアンネス・クリュソストモスなどがこの意味で使用してゐる。Lampe では「神秘的な観想に授かつてゐる」という意味で偽ディオニシオスの『神秘神学』からの用例が紹介されている。δρέλαστος と ἀμύητος の意味の違い等は、また別の機会に検討したい (Lampe, p.92)。

(13) CH II, 141A-B.

(14) CH II, 140C.

テアルキア (Θεαρχία) は θεός と ἀρχή から成ることばで、「神的原理」なども翻訳されてゐる。ここでは、原語のままギリシア語の音をカタカナ表記にした。
 ἐπιφάσμα は「似てゐること」、「類似」の意であるが、ここでも ὁμοίότης 「類似」と区別するため「相似」とした。

類似しない類似 (大目)

- (15) マ・アンティスは、140C-141A の箇所について、「全く適切でなく、*μα*をわしくなくも」(140C) のほろが「神に*μα*さわしい論理とその知恵」(140C) よりも優先されるのは、偽ディオニュシオスが再三強調しているように、被造物とその創り主は隔絶しており、テアルキアが我々の存在とは全く異なるためであると述べている。偽ディオニュシオスは、否定神学に従って、神を「類似しないもの」あるいは「模倣し得ないもの」と名づけることで、被造物と創造主の間の非類似関係を強調している。
- (16) Ysabel de Andia, *Henosis. L'Union à Dieu chez Denys l'Areopagite*, Leiden, N.Y., Köln, 1996, p.181, 182. 否定神学が、否定する者を神へと止揚させるという否定の特性については、今義博「偽ディオニシオス・アレオパキタにおける思惟の構造と神学の位置づけ」『文化と哲学』第五号、静岡大学哲学会、一九八六年、三三—三四頁を参照した。
- (17) 熊田陽一郎『美と光』国文社(マウロラ叢書)、一九八六年、一六一頁。
- (18) CH II, 141C.
- (19) CH II, 141A.
- (20) CH II, 141B.
- (21) Andrew Louth, *Denys the Areopagite*, 1989 p.46.
- (22) CH II, 141C-D.
- (23) CH II, 141D.
- (24) CH II, 141D-144A.
- (25) CH II, 144A-B.
- (26) CH II, 144B.
- (27) CH II, 144B-C.
- (28) ラウスは、情念の捉え直しについて、ディアドコスを代表とする修徳(神学)の影響を指摘している。情念を神聖なものとして捉え直すということは一種の浄化にあたり、これは快楽の抑制や神との一致のための修練を重視する修徳の影響であるという。「人間の情念の天上の世界への適合の仕方に関するディオニュシオスの解釈は、彼が第二の伝統(ディアドコス系の修徳)に属していることを示唆している。なぜならこうした情念が超越的な世界において意味を持つとするなら、恐らく純化がこの世での我々の修徳の努力の目的だからである」(Louth, p.46)。
- (29) CH II, 145B.